
IS『に』転生ってふざけんな！

出川 戦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS『に』転生つてふざけんな！

【Nコード】

N4278Z

【作者名】

出川 戦

【あらすじ】

この物語は、主人公が福音に転生して様々な困難に操縦者のナターシャと共に立ち向かっていく嘶である。

第1話（前書き）

完全なる思いつきです。連載という判断で大丈夫か・・・？

第1話

気付くと、俺は真っ暗な空間にただ1人いた。

（なんだ……ここは……？夢の世界ってヤツか？）

「ここはあなたの処刑場です」

女性の声が聞こえた。　　ってちよつと待て！

（なんだよ処刑場って！　　ていうかあんた誰だ！？　　あれ？声が出ない……）

「私は神様です。ここではあなたは魂だけの存在なので声は出ません」

（ああ、なんだそういう事か……って納得できるか！！）

「五月蠅いですよ」

神様（自称）は冷たい声でそう言った。

「まず説明しなければなりませんね。人の寿命は、その人が生前犯した罪によって減っていきます」

（あ、ひょっとしてそっちの手違いでまだ死なない俺を殺しちゃったからどっかの世界に転生させてくれるとか……って俺死ん

だの!?)

「そうです。あなたは死んだんです。あと、私たちは手違いなんてしません。なんせ全知全能ですからミスなんてあるはず無いのです」

(おおつふ・・・じゃあ、なんで俺ここにいるの?)

「あなたは小学生の時、同じクラスの子からゲームを借りたまま返しませんでしたね?」

(・・・・・・・・)

「さらにあなたは別の子から借りたマンガを返さなかったり、アンティールルで決闘デュエルしたりしましたね」

(・・・・・・・・はい・・・・・・・・)

「さらにあなたは物心ついた頃からつまみ食いをして続けていましたね」

(ちょっと待ってくれ! そんな程度で寿命削られてたのか!?)

「そうですね。積みりに積もった小さな犯罪が実を結んで、こうして10代でめでたくぽっくり逝く事になってしまいましたね(笑)」

(笑)じゃねえ!!何が悲しくて17で死ななきゃならなかったんだよチクショウ!)

「あ、一応言っておきますけど、あなたは本当は13歳で死ぬことになってました」

(なお酷いわ!! ……って、おい。それはどういう事だ?)

「あなたは非常識なほど悪運が強かったので、何度も死神が迎えに行きましたがあなたが死ぬことはありませんでした。なので私が直接手を下す事になったのです」

(……俺って、何度も死神に迎えに來られてたんだ……)

「つたく、役立たずが……。それで、私が直接人の生死に手を出す事はあまり望ましくない事なので、その処置としてあなたをどこか適当な世界に転生させます」

(今、神様が真っ黒になった気が……。つーかこれ、棚ボタなんじゃないか?)

「あなたが思っているほど楽な世界なんてありませんよ。それじゃあせめて行く世界くらいは選ばせてあげましょうか」

(ならISの世界で!ちゃんとIS動かせるようにしてくれよ!)

「誰が貴様のようなゴミ虫の言う事なんか聞くか」

(……あれ?なんかキャラ変わってない?)

「ごたごた五月蠅い! ISですね! それでは逝ってらっしゃい」

(字違う!! ……あれ……。なんだか意識が遠のいていく

)

（…………あれ？　ここはどこだ？）
俺が意識を取り戻すと、目の前には何台もの機械と大勢の研究者が忙しそうにしていた。

（あ、まさか俺、ここの研究者にでも憑依転生したのか？それにしても、ここの研究者は外人ばっかだな。外国語なんて何も出来ないぞ、俺）

などと考えていたら、俺の方に向かって金髪の20歳くらいのすげー綺麗な女性が歩いてきた。服装はレオタードのような格好をしている。おそらくアレがISスーツだろう。

（…………ってちょっと待て！あの人なんで俺の方に来てるんだ！？まさか俺の事が好きなんじゃないだろうか！！）
その時、俺は気付いた。『俺、さっきから声出してなくね？』と。

そして目の前の女性は……………3巻末と6巻の初めに出てきたナターシャさんじゃないか！

まさか・・・まさかとは思うが・・・俺、ちゃんと人間に転生してますよね、神様ア！！

「これからよろしくね、シルバリオ・ゴスベル『銀の福音』」

やっぱりかああああい！！！！

第1話（後書き）

ウザい主人公ですいません……。

ナターシャは福音の事を「あの子」としか呼んでいなかったのも、最後の方は悩みました。悩んだ結果がアレですが……。

「なんでナターシャが日本語で挨拶しているの？」という質問には、担当者が不在のためコメントできません。

下らない文章になるでしょうが、応援よろしくお願いします。

第2話（前書き）

「作者でーす」

神「神でーす」

「とゆーワケで、今作の前書き後書きは私達2人が進行させてい
ただきまーす」

神「よく神界まで来れたな」

「ほら、作者って言ってみれば神様より上じゃん。言ってみれば
界王様じゃん。だからフツーに来れるんだよ」

神「あ、そ」

「反応薄いなー」

神「じゃあ今回は主人公君の生前犯した罪について、まだ書いてな
かった細かいところも説明してさしあげましょう」

「でたよ、上から目線」

神「d m r k s。彼は1話で述べた他に、授業中にマリカしていた
リモンハンしていたりしていた」

「みんなもよくやってるよね」

神「黙れ喋るな息をするな。他にも小2の頃から菓子パンやお菓子
を持ちこんで早弁していた。中1の時は弁当だったので、早弁用の
弁当を持って来ていた始末だ」

「そりゃすごい」

神「あとは・・・昼休みに決闘デュエルしていた」

「私もやってますよ、ソレ」

神「さらに小1の時『お菓子あげるからついておいでよ』と知らな
い大人から声をかけられた時に、鼻で笑いながら『今時そんなのじ
や2歳児でもついてこねエよハゲ。警察に突き出されなくなかつた
ら財布を置いてさっさと消えな』と言い放つたり」

「それはひどい・・・」

神「他にも余罪はあるが・・・あまり長くするのもなんだ。これ

くらいにしておう」「

「そだね。では本編とつぞ」

第2話

（これ、終ったんじゃない？）

俺はまずそう思った。本当なら頭を抱えて絶叫して、なにか硬い物に頭部をぶつけてしまいたい衝動に駆られているのだが、なんせ手足が動かない。ついでに言うとか口もきけない。なにこのプレイ。誰得？

「これからよろしくね、『銀の福音』」
シルバリオ・ゴスベル
俺得でしたw。

（キタだろコレ！）

目の前にいるのは福音の操縦者のナターシャ・ファイルスさん。アニメで出てこなかったのが悔やまれる、挿絵で見た時「なんで2組の鈴がいてラウラがないの？」と思いながらも「なにこの新キャラのまさかのハーレム乱入」とかずっと考えてて6巻で再登場した時にテンション上がった俺の好きだったキャラだ。リアルで見るとすっげー美人。

まあとどのつまり、何が言いたいのかというと・・・今、彼女はISスーツを身につけている。という事は、今からISに乗ったりするわけだ。

そのISが何かって？決まっているだろうこの俺、『銀の福音』だ！
シルバリオ・ゴスベル

つまり彼女のナイス・ボディに俺が隙間無くくつつくわけで・・・
・ヤバい。考えただけで鼻血が・・・あ、鼻無いんだっけ。ついでに血も通ってないわ。

（いや、そんなブルツクみたいなネタを一人でやってんじゃねえよ！）

などと俺が至極どーでもいいことばかり考えて興奮していると、ナターシャさんは俺の頭？の部分に優しく手をかざした。

「・・・・・・・・？」

「どうかしましたか、ファイルス？」

研究者の1人がナターシャさんに尋ねたが、ナターシャさんは「いえ。何でもないわ」と答えた。

・・・・つか、英語で喋ってるんだよな。なのに普通にわかってるぞ、俺。やっぱISになったから頭の方も良くなってるのかもしれない。

「（気のせいかしら・・・・。いつもとISの反応が違うような気が・・・・・・・・）」

初期化と最適化が終って気付いたのだが……ISの装甲には、俺の感覚というものが通っていなかった……。

どういう事かというと、俺は初め、ナターシャさんの身体に密着するという事に対して興奮していたのだ。福音は装甲部分が結構多いから、ほとんど全身を同時に触っていられるという変態的思考で考えていたのだ。

だが現実とは違った。

ISの装甲部分に感覚が無いという事は、触っている感触もクソも無いのだ。ただ意識だけがISの中にある　　今の俺はそういう状態なのだ。

（期待した俺が……馬鹿だった）
心底俺はそう思った。

「ファイルス、調子はどう？」
オペレーターの女性がナターシャさんに訊く。

「うーん・・・なにか、違和感を感じるのよ。まるで誰かが私のすぐ近くにいるような・・・」

当たらずも遠からずです、ナターシャさん。俺がその誰かです。福音です。

「まだ一次移行もできてないし・・・チーフ、一度コアをリセットするべきではないでしょうか」
ファースト・シフト

（・・・は！？ ちよつと待ってくれ！ もしコアがリセットされたら、俺はどうなるんだ！？ このまま何もせずにナターシャさんを間近で見られてお終いか！？ あ、冥土の土産に丁度いいかも・・・ってそうじゃない！ せつかくなんだからこのままシヤルやラウラたちとも会わせてくれよ！ 臨海学校編でよオ！）

ISには、意識と似たような物がある・・・そう言ったのは、たしか山田先生だ。

その意識が俺だとしたら、コアのリセットは俺の消失に繋がりがねない。だから一刻も早く俺はナターシャさんの専用機にならないければならないんだ！

（がんばれ俺！ やればできる！ どう頑張ればいいのかわかんねエけど！）

とりあえず一次移行が終了するようにと俺をこんなのにした誰かさんに祈りを捧げると・・・

『

フォーマット フィッティング

初期化と最適化が終了しました。確認ボタンを押して下

さい』

ディスプレイにそう映し出されたのが解った。

「っえ！ さっきまで両方とも進行度がたった3パーセントだったのに……！？」

そんなバカな。あれからけっこう時間経ってたぞ。なのに3パーセントおかしいだろ。機械壊れてるんじゃないか？

「まあいいわ。それより、一次移行が済んだんだから早くテストを始めましょう」

ナターシャさんは研究員に向かってそう言った。

（ん？テストって……？）

俺がその疑問に気付いたまさにその時、目の前のシャッターが上がり、奥の戦闘スペースと思われる東京ドーム何個分かの広さの楕円形のスペースが姿を現した。

（これは……ISのバトルフィールドか……？）

アニメで見たアリーナの地形と酷似しているその中に、ナターシャさんは迷い無く俺を連れて行く。

今ので解ったが……どうやら、福音の操縦はナターシャさんによるそれが優先されるようだ。つまり、俺の意志は在って無いようなモノ、か……。なんだか悲しいな。

（まあでも、間近でISの戦闘が見られると思えば、少しは気も楽になるってか）

俺はISはアニメから入った。2話目を観て、すぐに原作を買った。

その理由は、アニメで観たISの戦闘シーンがすごく面白かったからだ。原作には軽く失望したが……。

キャラも可愛かったから好きだが……やっぱり、俺の中では戦闘が一番だ。

だから別に、俺自身が戦闘に参加できなくても構わない。すぐそばでアメリカトップクラスの操縦者の戦闘が観戦料タダで見続けられるんだ。こんないい話はそう落ちてないねきつと。

……はい。強がりです。自分も専用機持つてこの大空に翼を広げ飛んで行きたいです。翼をください。屋内なので大空は見えませんが。あと翼はもうありますが。まだ二次移行してないから機械っぽい多方向推進装置ですけど。
マルチスラスター

とかなんとか考えてる間に、俺とナターシャさんの正面にネイビーカラーのIS アレは、フランスの第2世代型の、ラファール・リヴァイブか が現れた。

（まさか、いきなり実戦っていうヤツじゃ……ないわけないか）

思えば一夏もそうだった。いきなり代表候補生のセシリアとタイマンで闘うという無謀な挑戦だった。

だが俺は一夏の二歩三步先に行く！ なんて言っただって、こっちは専門的知識すら単語1つも理解してないどころか見てすらいらないんだからな！

（とか何とか言っても、ただ見てるだけなんですけどね）

向こうは第2世代型だから多分一瞬で勝負が着くかな、と俺が思っていた時だった。

リヴァイブがアサルトライフルのロックを外したのが伝わって来た。これは撃たれるな。

だがこっちの操縦者はアメリカで最強のIS操縦者の1人だ。さらにこの福音は高機動と高火力を兼ね備えた機体だ。

こんな牽制なんて華麗に避けて迎撃する間もなく反撃してくれるに
違い

バカアアアンツ！

バリアー貫通、ダメージ89。 シールドエネルギー残量、911。
実体ダメージ、レベル中。

（痛てエー！？　なんだコレ！？　感覚ないクセに痛覚だけあんの
かよー！！）

俺は脚部に感じた痛みには戸惑いながら、なぜナターシャさんが避け
なかったのかを即座に考えていた。これもISになったお陰なのか
？すぐに最善の判断ができるんだけど。

で、その結果浮かんできた仮説が……『俺の動く意志に比例して、ナターシャさんの反応が福音へ伝わりやすくなったたり伝わりにくくなったりする』というのが真っ先に浮かんだ。

（ちょっと待ってくれ！ 俺は戦闘訓練なんて全くやって無い、ズブの素人なんですけど！？）

あと、今の俺は福音に搭載されているハイパーセンサーで全方位が視覚として認識できるんだけど、研究者の皆さんがなにやら不穏な動きを見せてるんですけど……。

（まさか、コアのリセットか福音の廃棄処^{オレ}分についての判断じゃないだろうな……！！！？）

第2話（後書き）

「おっと、まさかの3話目で完結か？」

神「いやさすがにそれは・・・」

「そういえば、彼がなにかあなたに祈ってましたけど、何かしたんですか？」

神「特に何も。やろうと思えば何でもできるけど」

「・・・それにしても、このままだとホントに次で連載終了すんじゃないか？」

神「大丈夫だろ。ドラゴンボールの悟空や悟飯だって何度も死にかけてるのに、蓋を開けてみれば死んだのは悟空が2回だけじゃないか」

「身も蓋もない事言うなよ。盛り上がらないだろ」

神「そういう発言は控えるよ」

続く

第3話（前書き）

「今日は寒かった」

神「唐突だな」

「関係無いけど、部屋でストーブ点けてさあ執筆だ、と思ったらマウスの電池が切れてたり」

神「ふむふむ」

「かと思ったら、実はマウスの電源がオフになってただけだった」

神「残念なヤツだな」

「まあ雑談はこれくらいにして本編始めますか」

神「本当に終わったら面白いんだけど」

第3話

（考える！　なんとかしてこの圧倒的なまでの危機的状況を打破するんだッ！！）

このまま死ぬのはまっぴらご免だ。だつてせっかくナターシャさんと会えたんだもん。このまま近くにいたら風呂場とかまで一緒に持つて行ってくれ・・・じゃない。ISの戦闘を直で感じられないじゃないか！！

（やってやる！　やるしかないんだ！！）

「（どついつ事なの・・・！？　福音が私の動きに全くついてこない！！）」

私は、今までとのISとは全く違う福音に戸惑っていた。

そもそも、この『銀の福音』シルバリオ・ゴスベルは国際条約違反の軍用IS。前まで操縦していた量産型や競技用のISとは少し勝手が違うとは思っていたけど……ここまで違うものなのとは思っていなかった。

ハイパーセンサーによる視覚補正で、研究所の職員が信じられないという顔で私を、福音を見つめていた。やっぱり、あの人達にも想定外の事なのね。

「（ここは一度引き上げて、検査してからもう一回テストするのが賢明ね……）」

私がテストを中断しようと、通信回線を開こうとした時微かに、声のようなものが耳に入った。

いえ、そうじゃない。耳で聞いたんじゃない、もっとこう……『感じた』とでも表現するべきな感覚。

「（まさか……でも、他に考えられない）」

ISには意識と似たようなものがあり、IS側が操縦者の特性を理解する事でその性能をより引き出させてくれるというのは有名な話だけど……これほど顕著に表れるモノなのかしら？

でもさっきの声のような……福音（この子）の叫びは、きくと闘いたいと言っていたわ。正確には解らないけど。

「一緒に、飛びましょう

銀の福音！」
シルバリオ・ゴスペル

（………？）

なにか聞こえた気がした。それも音じゃなくて………なにか、こう心に直接響いてきたというか、テレパシーみたいなのが。テレパシ－なんてしたこともされたこともないから、わかんねエけど。

（とにかく、今はあのリヴァイブをどうにかしなきゃな）

バトルフィールドの壁とかはエネルギーバリアーで防御されているので、壁が壊れたりすることは無いのだが、それでもその中にいたリヴァイブは銀の鐘をモロに食らったらしく、大ダメージを受けていた。

（いや強すぎだろ『銀の福音』シルバリオ・ゴスヘル！！）

アニメではラスボス的扱いで、原作では第4世代型2機に墜とされたが……。ここまでとは思わなかったぞ、軍用IS。

なんかさっき、近接戦に持ち込むと感じたんだが……。俺、素人だつて言っただじゃん！ でもここで動かなかつたらまた体勢を立てなおされて撃たれるだろうなあ……。痛かつたんだよね、撃たれたりすると。

『銀の鐘』と表示されたアイコンが、私の前に突如現れた。

「（この子が……私の気持ちに答えてくれたの？）」

すぐに私はアイコンをタッチして、銀の鐘を起動させた。

すると、今から私が動くべきイメージが頭の中に流れ込んできた。

その動きを忠実に再現し、頭から生えた翼のような多方向推進翼の砲門からエネルギー弾を放つ。

[illegible]

圧倒的なまでの数のエネルギー弾が、フィールドの中全てを焼き尽くした。
そしてもちろん、その的となった相手のリヴァイブには相当のダメージを与えた。

「（流石は軍用・・・出力がケタ違いね）」

でも油断は禁物。相手もアメリカの優秀な操縦者が搭乗しているわ。現にあれだけの火力の差を見せつけられても、まだ闘いを諦めてはいない。すぐに体勢を立て直し始めている。

この子の性能は、^{スペック}攻撃力だけでなく機動力も高かったハズ。今は出力を抑えて通常戦闘仕様にしてあるけど、本来は超高速で動けるほどのスピードがある・・・。

「（ここは近接戦で一気に攻めて、勝負を着けるべきね！）」

ギュンーーーーッ!!

「うそっ!？」

私は今起きた現象に、驚く事しかできなかった。

私はただ『一気に近付こう』と思っただけなのに……この子は勝手に、イグニッション・ブースト瞬時加速と間違えるほどの急加速で相手に近付いた。

まだ接近すると命令していないのに、私の判断を上回る速さでこの子は動いた。

「（本当、どこまでも変わった子ね）」

うおおおお。やべえ、今のはヤバかった。

ナターシャさんが近接戦をしようとしたような気がしたから、急加速で近付こうとしたのに……。その急加速が半端ねエ！危うく墜落するところだった。一夏みたいに。

寸前のところで急停止が間に合ったから良いものの、二度とこんな肝を冷やすような事はしたくないね。

（そういや、俺って福音つふみがどれだけの性能を持っているのか知らないんだよな。まあ、表とか見せてもらっても解るとは思えないけど）

え？　なんでだらだらそんなに喋っていられるのかって？

それは、もう戦闘テストが終っちゃったからなんだよな……。。

接近中に近接武器がないかと探してただけど・・・福音^{オレ}、武器が翼しかなかったんだよ。刀1本の一夏の気持ちがよく分かるぜ・・・。

だからそこからまたエネルギー弾を乱射して、そのままゴリ押しして戦闘終了。ああ、高火力って素晴らしい。

そういえば、ナターシャさんは俺が突っ込んだ時に（リヴァイブに急加速したこと。べ、別に他の意味なんてないんだからねっ！）ビツクリしてたから、俺の意志が優先される場合もあるって事が・・・。

まだまだ解らないことだらけだな、この状態。

とにかく今日はもうお終いみたいだし、今後の俺の行方はまさに神のみぞ知るってことだ。

あの神様だけが、な。

第3話（後書き）

神「終わらなかったね」

「当たり前ですよ。3話で終了ってちよつとした記録ですよソレ」

神「つち。つまんねえの」

「それはそうと、知ってるんですか？この先」

神「そりゃあ神だし」

「ですよー」

神「つーかさ、福音に近接武器無いつてホントなの？」

「知らない事あるじゃん。福音戦では一回も、そういう描写は無かったんですよ。だから持たせようかとも考えたんですが……やめておきました」

神「コレは今後に大きく影響を与えますね。先は考えてあるの？」

「あと2、3話分は。それから先は……どうしようか？」

神「終りで良くね？」

「せめて10話はやろうよ」

続く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4278z/>

IS『に』転生ってふざけんな！

2011年12月16日19時48分発行